

オンライン研修における非同期型協調学習の活動設計検討 性的不正行為からの保護研修の事例

Design Study of Asynchronous Collaborative Learning Activities in Online Training
The Training Program of Protection from Sexual Exploitation, Abuse and Sexual
Harassment (PSEAH)

松本幸子 戸田真志 久保田真一郎
Sachiko Matsumoto Masashi Toda Shinichiro Kubota

熊本大学
Kumamoto University

＜あらまし＞ 本研究は、国際人道支援・開発協力従事者向けのコンプライアンス研修を対面集合形式からオンライン化するにあたって、既存研修の教育設計の検証と非同期型の協調学習の活動設計を検討した。既存研修の教育設計を倫理的意思決定プロセスで分析し、態度や行動変容を促す学習目標の達成に必要な非同期型の協調学習活動を特定した。既存研修の教育設計の妥当性を検証することで、非同期型学習に適した協調活動を絞り込めることが示唆された。
＜キーワード＞ 非同期、協調学習、教育設計

1. はじめに

企業研修はコロナ禍でオンライン化が一気に進み、オンライン集合形式が主流になった。しかし、コンプライアンス研修に限っては個人で学習する録画コンテンツ視聴形式のeラーニングが最も多い（パーソル総合研究所 2021）。本研究は、対面集合形式のコンプライアンス研修をオンライン化することで、他者との協調学習を含むeラーニングの設計を試みる。既存研修の教育設計を倫理的意思決定プロセスの枠組みで分析し、既存研修がもつ協調学習活動に対して、オンライン化における設計上の課題を考察し、学習目標に適した協調学習活動を選定する。研究対象は、国際人道支援・開発協力従事者向けの職務倫理教育の一環で、支援者による性的不正行為からの受益者の権利保護（PSEAH）である。同テーマは、国際社会が丸丸となって取り組んでいる喫緊の課題であり、国連の機関間常設委員会（IASC）が「性的不正行為に No と言おう」という研修パッケージを開発し、ウェブサイトで公開している（IASC 2020）。

2. 既存研修の分析とオンライン研修の活動設計の検討

2.1. 既存研修の教育設計分析

水村（2020）は、コンプライアンス研修で「やらされ感」が生まれないように倫理的意思決定プロセス（1～3 段階）を踏まえた研修

設計を提唱する。第 1 段階は問題行動の背景にある前提を問い直し（意識づけ）、第 2 段階は批判的に振り返ることにより前提を変化させ（リフレーミング）、第 3 段階では最適な行動を選び取り行動の意図を立てられるための支援から成る。この枠組みに照らした結果、既存研修は、これまで明るみにされてこなかった支援者と受益者の性的な関りを支援者による不正行為としてリフレーミングし、PSEAH に関わる行動規範を現場に定着させることが教授方略に含まれており、倫理的意思決定プロセスに準じていた。学習目標は知識習得と応用に加えて、意識・態度変容、及び実務で行動に移すための準備が含まれる（表 1「全体の目標」）。

このような新しい問題解決に向けた知識構築は、他者との対話を通じた協調学習が有効である（加藤と望月 2016）。既存研修は、複数の学習者が協力し合って事例を分析し、問いへの答えを導き出す問題基盤型の協調学習が中心でグループ討議やロールプレイといった他者との相互行為を伴う 16 の活動を含む。

2.2. オンライン研修の設計検討

前述の分析結果の通り、現行研修の教育設計は倫理的意思決定プロセスに照らして適切である。したがって、オンライン研修の設計は既存研修の教材（テキスト、映像）や活動を有効活用する。協調学習は、ディスカッション機能を持つ学習管理システム（LMS）や

Zoom 等のビデオ会議システムの普及によりオンライン化が実現できる。ただし、本研究の学習対象者は国内外に分散していることから、いつでもどこでも学べる非同期型オンライン学習が適している。非同期コミュニケーションは時間を要し、学習者の思考の深さも増すことから、多すぎる活動は混乱や負担の原因になりやすく、活動数を厳選するのが望ましい（Conrad and Donaldson 2004）。

これらを踏まえて、既存研修の 16 の協調学習活動を最小限に絞ることとし、以下の 3 つの選定項目、①学習目標に準じていること、②異なる視点が理解の深化に役立つ内容であること、③ディスカッション掲示板を用いて達成できること、を用いた。その結果、主に事例分析とグループ討議による 6 つの活動に絞られた（表 1）。事例分析を用いた活動は、4 つの活動で同じ事例「アフリダの物語」を用いることで複雑化を回避する。

3. まとめと今後の課題

対面集合研修をオンライン化するにあたって、既存研修の教育設計の妥当性を検証することで、非同期の協調学習に適した活動の絞り込みができた。ただし、態度変容のプロセスは、前提や価値観を問い直すため、心の葛藤や感情の混乱が生じやすい（Cranton 1992）。学習者が戸惑い、疑問や不安が湧いた際の支援には、即時のやり取りや感情的な情報交換に適した同期コミュニケーションが有用である。しかし、非同期型を主とした研修内で、どのような同期コミュニケーションをどのような位置づけで設定するかは、さらなる設計上の検討が必要である。

注

1) 本研究対象と同じ既存研修モジュールを用いたオンライン集合研修（同期型）は既に設計・開発され、2022 年から実施されている。

参考文献

Conrad, Rita-Marie. and J. Ana Donaldson (2004) Engaging the Online Learner: Activities and Resources for Creative Instruction. Jossey-Bass Guides to Online Teaching and Learning Vol.1, San Francisco, CA.

Cranton, Patricia (1992) Working with Adult Learners. Wall&Emerson, Inc.
（パトリシア A. クラントン、入江直子・豊田千代子・三輪建二（訳）おとなの学びを拓く自己決定と意識変容をめざして）

IASC (2020) Saying No to Sexual Misconduct--Training Package Download Page.
[https://interagencystandingcommittee.org/iasc-champion-protection-sexual-exploitation-and-abuse-and-sexual-harassment/saying-no-sexual-misconduct-training-package-download-page\(2023-06-25](https://interagencystandingcommittee.org/iasc-champion-protection-sexual-exploitation-and-abuse-and-sexual-harassment/saying-no-sexual-misconduct-training-package-download-page(2023-06-25) 参照)

加藤浩、望月俊男 (2016) 協調学習と CSCL. ミネルヴァ書房、教育学選書 II (4)
水村典弘 (2020) コンプライアンス研修の設計と実際—研修の死角と「やらされ感」を生む原因—. 日本経営倫理学会誌, 27:221-233

パーソル総合研究所 (2021) コロナ禍における研修のオンライン化に関する調査。

表 1 学習目標に準じた協調学習活動の選定

段階	全体の学習目標	協調学習の活動と学習目標
意識づけ	性的不正行為の定義とそれに気づく方法を学ぶ	事例分析とグループ討議：被害者と支援者の力関係とその要因／影響を説明できる
	被害者に共感し、被害者の立場になって考える	事例分析とグループ討議：課題解決より得られる効果を説明できる
	許容できる行為とできない行為を知り、それに応じた行動する	事例分析とグループ討議：不正・不適切事案の顛末を説明できる
態度変容		事例分析とグループ討議：グレーゾーンの事象に対してジェンダー視点を踏まえて正しい判断ができる
		事例分析とグループ討議：行動規範に照らして、許容できる行動とできない行動を区別できる
行動変容の準備	不正行為発生時の役割、責任、取りうる行動を明確にする	グループ討議：従事者の置かれた状況を踏まえた上で、行動規範に準じた最善の選択肢を選び取るための具体的な行動の意図を立てることができる